ど「南無阿弥陀仏作善集」に見えるかれの救済事業が一々その現地の実査を経て実証されていることは、備中におけるかれの遺跡なるものがかれに先立って成尋阿闍梨の渡宋前に一時滞留したところでもあったことを明らかにされていることとともに、読むものに一種の感銘を呼びおこすものがある。重源については一遍上人のこの地方における布教事蹟が主としてその縁起絵巻ならびに年譜に即して述べられる。ただそれら重源や一遍による念仏遺蹟が中世末日蓮宗の普及によって、漸次その宗に転向せしめられたという、その顚末やそれに伴なう諸問題、少しおくれて不受不施派の運動などについての論考が一篇も見出せないことは、備中の出身でわが国臨済禅の開祖となった栄西の事蹟についての記述が同じく一篇もないこととともに、この部の標題（中世の宗教と芸能）から期待されるところをなお十分に満たしていない憾みが感ぜられる。

最後に「近世の人間像と歴史」としてまとめられたのは「宇喜多秀家の人間像」以下、石見銀山の山師安原国繁をはじめ、地理学者古川古松軒・国学者藤井高尚・尊攘の志士藤井高雅・萩原広道らの伝記的研究である。そのうち藤井高尚・高雅の両人については、教授は早く別々にその詳伝を著わして吉備津神社より刊行されているので、本書に収められていたものは、たまたまそれに漏れた逸事をめぐる小篇に過ぎないが、高雅（大藤幽叟）とその叔父・緒方洪庵、ならびに萩原広道と藤井高雅の二篇は、幕末風雲急なる時において草莽の国学者と著名な蘭学者との間にかわされた憂国の思、心を打つものがあり、ついに書斎に留まりえずして実践運動に飛込んで行った悲劇の主の一面がよく描かれている。

以上本書の内容の極一部を紹介したに過ぎないが、冒頭にも述べたようにわが国における、もっとも古い政治文化圏の一つとしての吉備地方が、歴史を通じて進み来った足跡のうち、主要なものはほとんど本書の中に尽くされており、本来はそれぞれ独立に執筆された論文の集録であるにかかわらず、そこにほぼ一貫した地方史の像が描き出されてあることが、何より本書の功とすべきところであろう。強いて望蜀の念を付加すれば、近世藩政時代についての論考の甚だ少ないことであって、その方面は教授の関心のおのずから外にあったかとも察せられるが、かつて「池田光政日記」を解読刊行せられた教授のことでもあり、岡山藩の尨大な文書記録をその図書館に引きついでいられる大学のことでもあって、今後必ずやその方面の論考が書きつづけられて、第二、第三の吉備地方史の公刊されるに至るべきを期して待ちたい。切に教授の加餐を祈る。

（A5判　本文五九一ページ　口絵六ページ、京都法藏館発行、定価六、二〇〇円）

（柴田　実）

フィッシャー著
浅田　実訳

一六・七世紀の英国経済

E・J・フィッシャーは、ロンドン大学においてかのR・H・トーニーの学燈をうけついだ、一六・七世紀イギリス経済史研究の最重鎮である。彼の研究は、その一編

一編が研究史にまったくの新生面を切り開くような画期的なものばかりであるが、その名が専門研究者以外にはトーニーほどに知られていないとすれば、まとまった著書がほとんどないことが、その主要な原因であろう。この点で、浅田氏によるこの訳書は、教授の歴史学を体系的に理解するためのまたとない機会を与えてくれることになろう。本書には、教授の方法論上の立場を示した就任講演のほか、ロンドン港の輸出統計をもとにして輸出変動と貿易政策の変化の関係などを扱った二論文――この二論文はわが国でも従来から比較的多くの研究者によって紹介され、活用されてきた――、さらに「衒示的消費」の中心地、つまり最大の統一的国内市場としてロンドンを描き出した論考、の計四論文がおさめられている。この選択は、教授の学問の体系を理解するうえでは、ほぼ妥当な選択であるといえよう。方法論や問題意識の点では、トーニーへの献呈論文集に掲載された「トーニーの世紀」が収録されるべきであったが、各種の制約からやむをえなかったのであろう。一言でいうならば、トーニーの課題が産業革命以後顕在化した一九世紀的社会問題の歴史的解明にあったのに対し、二十世紀後半の人類の最大の課題の一つ＝南北問題こそが、フィッシャー史学の基底にある関心事だといいうる。国内の社会問題を照らし出すことではなくて、現代の低開発国の開発問題に何らかの――もとより直接的ではありえないが――光をなげかけることが、その目的なのである。

本書の第二・第三論文は、輸出についての基礎的な統計データを整備した点に最大のメリットがあるが、さらに付言すれば、国際経済の変動がいかにイギリス経済の構造および政策の変革に方向を与えたかということもさし示した。重商主義概念の再検討も、ここから一つの刺激をうけた。今日では、彼のデータは地方港についてのそれ(ex. Stephens, 'The Cloth Exports of the Provincial Ports, 1600-1640', *Econ. H. R.*, 2nd ser. vol. XXII, 1969.) とあわせて検討されなければなるまい。

第四論文は、食糧市場にかんする彼の他の論文とともに、国内の需要構造の変化をひきおこす源としてのロンドンを論じている。それはむろん、たんに外需に対する内需の問題というわけではない。需要構造の転換は、低開発経済に固有のいわゆる反転労働供給曲線からの脱出(第一論文二一頁の訳はやや不適切だし、「田舎」は「諸国」の誤訳であろう)という、ヴェーバー以来現代にまでいたるまでの近代化論＝開発論上の大問題にかかわってくるのである(この点では、*Past & Present*, no. 37, 1967 Wrigley の論文などが併読されるべきである)。

訳文は平明で読みやすい。むろん翻訳というものにつきものの誤訳ないし訳しすぎの個所が二つ三つ筆者の目にもついた(たとえば三九頁六―一〇行目は誤訳と思われる)が、原注が少なく、出典不明の引用の多いこのような諸論文をたんねんに訳出された訳者のねばりに敬意を表しておきたい。

(B6判、一七二頁。一九七一年六月、未来社刊〔社会科学ゼミナール52〕定価四八〇円)

(川北　稔)